エディプス・コンプレックス概念に関する覚書

青山学院大学大学院　富田 悠生

Notes on the concept of Oedipus Complex in Psychoanalysis

Yuki Tomita

Abstract

In this paper, the author has taken up the concept of Oedipus complex. It is mainly reviewed what kind of historical changes the concept of the Oedipus complex from a psychoanalytic viewpoint is focused on the Freud,S' works. Freud,S. resulted in the conclusion Oedipus complex played an important role in the process converted into the super ego. And the attainment is considered to have been succeeded by Klein,M.,Bion,W.and Kleinian at present age. The fact that various studies about Oedipus complex made development of psychoanalysis was very interesting. In the psychoanalytic point of view, it is to work through between Oedipus complex and depressive position is thought as essence.

Key words:Oedipus Complex, Early stages of Oedipus Complex, Oedipal situation, Oedipal illusions.

I　はじめに

エディプス・コンプレックスは最初から精神分析理論の中心的位置を占めており，多くのことが変わった現在でもそれはそのままである（Britton,R.，1998；Boswell,J.，2001；藤山，2003）と考えられている。私は精神分析に関する知的学習の過程のなかで,エディプス・コンプレックスについて幾ばくかのことを知っていた。これまでの私にとって，エディプス・コンプレックスとは同性の親に対する敵意と異性の親に対する愛情であり，同性の親との対決という意味であった。しかし，精神分析に関する文献を読み込んだり，精神分析（精神分析的心理療法）の臨床素材に耳を傾けたりするうちに，エディプス・コンプレックスという概念を自分はよく知らないのではないか，という疑念を持つようになった。文献や臨床素材に現れるエディプス・コンプレックスは，Freud,S. によって導入されたエディプス・コンプレックスしか知らなかった私にとって，意味が大きく異なっているように思えたのである。そして，結果的にエディプス・コンプレックスは私にとってよく分からないものとなってしまった。そのような状態のまま年月が過ぎたが，私は最近，エディプス三角形が特徴的に表現されていると考えられる事例に出逢った。クライエントは約1年半の精神分析的心理療法の結果，一定の治療成果を得て社会復帰を果たした。しかし私は，彼との心理療法でどのようなことがなされて，どのようなことがなされなかったのか，はっきりと理解できていない気がしていた。私は彼との精神分析的心理療法について，もっと理解したいと考えるようになった。そして，理解するために用いる視点にはエディプス・コンプレックスという概念が大きく寄与するだろう，と直観的に思った。私は，歴史的に重要な論文を自分なりに読みこなすことによって，エディプス・コンプレックスを日々の臨床に組み込みたいと考えたのだろう。

当初 Freud,S. が提唱したエディプス・コンプレックスの概念は，後に Klein,M. によってその臨床的価値が拡大され，さらに Bion,W. から新たな視点をもたらされ，更なる飛躍を遂げたとされている。また Britton,R や Ogden,T らによって抑

うつポジションとの関連が議論されるようにもなっている。本研究では，エディプス・コンプレックスの概念が対象関係論のなかでどのような理論的変遷を辿ったのか，また現在ではどのような位置づけにあるのかについて明確にすることを目的としたい。

Ⅱ　Freud, S. のエディプス・コンプレックス

最初に，Freud,S. がエディプス・コンプレックス概念を着想したギリシア戯曲『オイディプス王』物語（川島，1996）を引用したい。

オイディプス王の両親であるテバイの王ライオスとその妻イカオステは，「みずからの子どもが父親を殺し，母親を妻とするであろう」というアポロンの神託を恐れ，幼いオイディプスを殺すよう家来に命ずる。しかし，不憫に思った家来は，森で遠国コリントスの家来にオイディプスを引き渡す。その後，オイディプスは，子どもなかったコリントス王の王子として成長する。やがてオイディプスもアポロンの神託を知り，信託が実現することを恐れ，実の両親と信じるコリントスの王と王妃の元を去り，放浪の旅に出る。しかし旅先で，実の父親とは知らずにライオスと言い争いになり，殺してしまう。その後，テバイの人々を苦しめる怪物スフィンクスの謎を解き，テバイの国を救い，英雄として迎えられる。そして，その国の王妃で未亡人となっていたイカオステを実の母親とは知らずに迎えることになる。やがて，テバイの国に様々な災難が降りかかるようになる。その原因は，前王ライオスを殺した犯人が不明であることが大きく関わっていることが分かり，オイディプス自ら犯人捜しを進めていく。しかし，その過程で自身の出生の秘密が次々と明らかになり，オイディプスの実の両親はライオスとイカオステであるという真実に突き当たる。絶望のあまり，イカオステは自殺し，オイディプスは自らの目を突き刺し，盲目となる。

Laplanche,J.・Pontalis,J.（1967）は，Freud,S. のエディプス・コンプレックスについて以下のように記している。

子どもが両親に対して抱く愛および憎悪の欲望の組織的総体をいう。その陽性の形ではコンプレックスは「エディプス王」の物語と同じ形で現れる。すなわち，同性の親である競争者を殺そうとする欲望と異性の親への性的欲望である。その陰性の形では逆になり，同性の親への愛と異性の親への嫉妬と憎しみとなる。実際には，エディプス・コンプレックスの「完成した」形では，この2つの形態は様々な程度で併存するものである。

フロイトによれば，エディプス・コンプレックスは3歳から5歳の間に頂点に達する男根期に体験される。その凋落は潜伏期への移行を示す。それは思春期に再び復活し，一定のタイプの対象選択により，程度の差はあっても克服される。

エディプス・コンプレックスは人格の構成と人間の欲望の方向づけに基本的な役割を演じる。精神分析家はこれを精神病理学の重大な関係軸とし，全ての病理学的型態について，その位置とその解決の様相を決定しようとする。

精神分析的人間学はエディプス・コンプレックスの三角的構造を明らかにしようと努める。そしてこのコンプレックスは，単に両親と子どもによる家庭が主流となっている文化だけでなく，あらゆる文化においても普遍的に認められるものであると考えられている。

Freud,S. は，1897年10月15日のフリースへの手紙のなかで，「エディプス王の物語が何故人のこころを捉えるのかが分かった。…このギリシア神話は誰でもが自分自身のなかにその存在の痕跡を認めうる強迫を明らかにしている」と記し，Freud,S. 自身の自己分析によってエディプス・コンプレックスの存在を漠然としてではあるが認めつつあることを示している。そして，1905年の『性欲論三篇』のなかで「すべての人間にエディプス・コンプレックスを克服するという仕事が課せられている」として，エディプス・コンプレックスの普遍性を示唆している。そして，その後の『自我とエス』のなかでは「男の子は母親に両価的な態度をとり対象選択をするだけでなく，同時に女の

子のように父親に女性的な優しい態度をとったり，母親に嫉妬的・敵対的態度をとることがある」と述べ，エディプス・コンプレックスの陽性と陰性が入れ替わる可能性について言及している。

エディプス葛藤が生じる時期として，Freud,S.（1916）は，小児期，つまり3歳から5歳頃を想定していた。Boswell,J.（2001）の説明によれば，それはペニスが少年にも少女にも特別な意味を持つ時期であるという。つまり少年少女にとって，徐々に自分の性別がアイデンティティとして認識されるなかで，彼らは同性の親と異性の親を区別するようになるのである。Freud,S.は，男児にとって陽性エディプス・コンプレックスは，母親への性器的願望を含んでおり，それには父親を殺したくなる気持ちを生み出す父親への嫉妬が伴うと考えた。すると，父親は男児の性的欲望を禁じ，去勢を迫る恐ろしい人物となる。男児は，去勢の恐怖によって母親に対するリビドー的欲望を放棄するように強いられ，通常の発達過程では性的対象としての母親を放棄することなる。性的欲望を禁止し，懲罰しようとする父親は取り入れられて，超自我の中核を形成する。それは，良心や倫理観，道徳観などにも繋がる。最終的に形成される超自我は，Freud,S.にとってエディプス・コンプレックスの解決，解消とみなされている。

Ⅲ　Klein,M.の早期エディプス・コンプレックス

Klein,M.（1926，1928，1945）は，早期の乳幼児観察及び臨床実践を通じて，Freud,S.のエディプス・コンプレックスを広範に修正するよう導かれた。Klein,M.は，男児の母に対する性的欲望，それに関連する父親への嫌悪と父からの報復への恐怖，内在化された両親像から形成される超自我などのFreud,S.の知見に敬意を表するように賛同を示している。

しかし，Klein,M.は乳幼児期の子どもたちが示す原始的・迫害的不安のなかに罪悪感が認められるとしてエディプス・コンプレックスの発現は生後1歳頃，つまりFreud,S.による想定よりもずっと早期に現れると述べている。当然，超自我の形成もこの頃から行われると考えられる。さらにKlein,M.は，3歳から5歳頃に形成されるとするFreud,S.による超自我は，人が生誕から投影と摂取の過程によって徐々に築き上げられた内的対象世界の進化した在り方であるとした。次にKlein,M.は，個人のエディプス的発達が辿る道筋は，最初の対象関係によって決定的に左右されるとした。つまり，母親との関係を重視したのである。内在化された母親の乳房は，内在化された父親のペニスとすぐに結合され，超自我の基礎になると考えた。

Klein,M.は，エディプス的経験は，より愛する感情が優勢になり始めて抑うつ的罪悪感，気遣い，償いたい願望をもたらすようになったときに生じると主張した。そして彼女は，Freud,S.による口唇期，肛門期，性器期という発達段階を修正し，ポジションという概念を導入した。ポジションとは，あらゆる情動的・認知的体験がどう組織化されるかを本質的に規定する複合的な心的状態を指す。こうして，エディプス・コンプレックスの解消という考えが放棄された。ポジションは固定されたものではなく，内的な感情や外的な圧力に反応する，流動的なものであると考えられたからである。

Klein,M.は，1928年の『早期エディプス・コンプレックス』のなかでは，乳幼児の攻撃性，原始的羨望の役割を強調している。しかし，1945年の『早期不安に照らしてみたエディプス・コンプレックス』では，良い対象，すなわち母親の乳房に対する愛情が安全な内的世界を構築できる本質的な基礎である，と述べている。また，母親が課す離乳などの欲求不満によって，子どもは父親へと向かうことになり，父親のペニスは第二の重要な内的対象を形成するとした。良い母親と良い父親という内的対象は，強い不安を鎮める役割を果たし，子ども自身の憎悪が生み出す罪悪感に子どもが圧倒されないように助けるものである。しかし，子どもは自分自身の性器的関心に気づき始め，それを親同士の性的関係に結び付けているため，両親への羨望や嫉妬，苦痛を体験することになる。これらの情動は，良い内的対象の支えを基にワークスルーされ，抑うつポジションの確立へと繋がっ

ていく。良い感情と悪い感情の活動を十分認めることは，こころの成長や発達の重要な課題とみなされている。そして，これは精神分析実践の治療目標ともなっている。Klein,M.（1926）は，以下のように記している。

子どもは，ごく幼い年齢のときに現実によって課される剥奪を通じて，現実をよく知るようになる。子どもは，現実を拒絶することによって，それから自分を守る。しかしながら，根本的なこと，そして現実への適応のためのあらゆる後々の能力の基準は，子どもがエディプス状況の結果である剥奪にどの程度耐えられるかである。

このKlein,M.の記述は，ほとんど抑うつポジションを説明していると私には思える。抑うつポジションとエディプス状況との関係は，容れものとなかみとの関係であり，互いに形作りあい，影響を与え合う（Ogden,T.，1986）ことが示されていると言える。

Ⅳ　Bion,W.のエディプス・コンプレックスへの貢献

Hinshelwood,R.D.（1998）は，「エディプス・コンプレックスは，一方の親を愛し他方を憎むといった三者関係のなかで，愛することと愛されること，憎むことと憎まれることの結合として言及される。これらはときに，LあるいはH結合として言及されることもある」と述べている。彼は，オイディプス王の戯曲は，恐ろしい隠された知（K結合）の発見の物語であることに焦点を当て，「知ることへ局面を加えた」としてBion,W.の功績を説明している。つまり，Bion,W.は，従来の性的感情／リビドーにまつわる局面よりも，知の側面に注目したのである（松木，2010）。松木はBion,W.の貢献を以下のように述べている。

Bion,W.はエディプス理論の諸要素を検討した。要素として，①父母子関係への気づき，②情緒に関連した前概念，③①によって引き起こされる心理的反応をあげ，性・好奇心を加えた。これらの「リンキング（連結）」と「断裂」は，L，H，もしくはKによって成し遂げられる。Freud,S.のエディプス・コンプレックスは，これらの諸要素が物語という形式によって「リンキング」され，ひとつの思考―〈C（夢・夢思考・神話）水準〉の思考―でその意味を表出している。しかしながら，エディプス要素群の「断裂」によってエディプス・コンプレックスは，思考の原初水準であるアルファ要素（B水準）やベータ要素（A水準）にもなりうる。つまり，ここでBion,W.は，実際には〈C水準〉の思考だけでなく，アルファ要素やベータ要素という他の水準の思考が入り混じって表されている幼児の早期エディプス状況を，Klein,M.が〈C水準〉思考としてまとめてしまっていた誤謬を整理した。

…もう一つの貢献として，Bion,W.は，エディプス三角形を形成する「接合しているカップルmating couple」に注目した。その「カップル」は，主体（患者）が関与できないままに「破壊－怪物－赤ん坊」もしくは，「創造－赤ん坊」との三角形を創り出す。またあるいは，その主体がカップルを創り，前述のどちらかの赤ん坊が産み出される。ここは，「エディプス三角」が創り出され始めるまさにそのとき―生来の前概念としてのエディプス状況の最初の現実化過程―が描かれている。そこでは，「エディプス概念」が破壊されてしまう（最も原初的な不安である破滅不安／カタストロフィ）が作動している。

松木（2010）は，Bion,W.によってエディプス葛藤の水準を見極める視点が提供されたことに言及している。思考のグリッドというモデルをエディプス・コンプレックスに適用することで，縦糸に横糸が絡むように整理されていることが分かる。

Ⅴ　Britton,Rによるエディプス・コンプレックス再考

Britton,R.（1998）は，Klein,M.がエディプス状況という用語を採用し，そこにFreud,S.が原光景として言及していたもの，すなわち知覚されたり

想像された両親の性的関係を含めていることを強調し，エディプス状況の視座からエディプス・コンプレックスと抑うつポジションのワークスルーとの密接な関係を認めている。Britto,R.(1989)は，以下のように述べている。

親の性的関係の最初の認識は，母を唯一永久に所有するという考えを放棄することを含み，重大な喪失感に通じる。それは，耐えられなければ，迫害感になるかもしれない。後には，エディプス的遭遇は，親と子どもの間の関係とははっきり異なる親同士の関係との差異の認識をも意味する。つまり，親同士の関係は性器的であり，子どもを作るものであるのに対し，親 - 子ども関係はそうではない。この認識は喪失感と羨望を生み出し，もし耐えられなければ，不平や自己蔑視の感覚になるかもしれない。

Britton,R.（1989）は，子どもが親同士の関係から排除される苦痛を明確に描き出している。彼は以下のように続けている。「この苦痛が良い内的対象に支えられながらワークスルーされるとき，子どもには参加者ではなく証人であるという第三の種類の対象関係のための原型が供給される。そのとき，対象関係を観察できる第三の位置 a third position が成立する。これによって我々は，自分たちが他者と交流するのを見たり，自分自身の見方を保持しつつ別の見方を抱いたりする能力，つまり我々自身でありながら自分について振り返る能力がもたらされる。これは，我々が分析において，我々自身及び患者に見出したいと望む能力である」Britton,R. の示す第三の位置は，主観的な考えが抑制されるという意味で様々な知見に拓かれて，思考に拡がりがもたらされるであろうし，結果的により創造的ともなるように思える。

さらに彼は，両親の関係の心的現実性を否認するために，錯覚的なエディプス配置が防衛的組織として形成される，と述べ，抑うつポジションへのワークスルーが妨げられるという視座を提供している。そしてギリシア戯曲において，この現象をオイディプスが母イカオステを妻とし，王座に就き，事実を知っているが見て見ぬふりをすること，と説明している。さらに，エディプス的な三角形を見るとき，二者関係は殺されるが，それは関係の死ではなく，関係についての考えの死であることを述べている。また，そのことを認識できるのは，失われた排他的関係の喪を通じて行われると続けている。

Ⅵ　結語

松木（2010）は，エディプス・コンプレックスをめぐる学究的背景について，以下のように述べている。「Klein 派精神分析においては，ある時期まではエディプス・コンプレックスは目立った討論や研究のテーマではなかった。それは，Bion,W. がエディプスを取り上げた 1960 年代においてもそうだった。しかし，母子の二者関係に重点を置いた Klein,M. の新しい考え―すなわち妄想 - 分裂態勢や抑うつ態勢や投影同一化―についての検討が一段落した1980年代後半において，“エディプス・コンプレックス”は再び，特に抑うつ態勢や原光景との関連で Kleinian のあいだでもその臨床的な重要性が注目されてきたように思われる」なかでも，代表的な視座は，本稿でも取り上げた Brittton,R. による第三の位置概念であろうと考えられる。松木は，他にも，O'Shaughnessy,E.（1989）や Feldman,M.（1989）による論考を紹介している。

精神分析的臨床実践において，治療者が念頭においている転移 / 逆転移をはじめとした治療関係は，ほとんどが二者関係で推移していると考えがちである。しかし，その二者関係も確たるものではなく，大変流動的で変化しやすいことを我々は知っている。抑うつポジションをワークスルーしていく過程においては，エディプス三角形という三者関係が浮かび上がっているという重要な視座は，治療者が持ちうるこころのスペースと関連があるようにも感じられる。

謝辞：対象関係論 Kleinian approach の理論，臨床実践についてご助言，ご指導を賜りました青山学院大学教育人間科学部教授　平山栄治先生に厚く御礼申し上げます。

文献

Boswell,J. (2001). Oedipus Complex. In:Bronstein,C.(ed.) Kleinian Theory:A Contemporary Perspective. Whurr Publishers. 福本修（訳）(2005). エディプス・コンプレックス. In: 福本修・平井正三（監訳） 現代クライン派入門—基本概念の臨床的理解— 岩崎学術出版社, 79-98.

Britton,R. (1989). The missing link:Parental Sexuality in the Oedipus Complex. In:Shafer,R.(ed) (1997). The Comtemporary Kleinians of London. International Universities Press. 福本修（訳）(2004) 失われた結合：エディプス・コンプレックスにおける親のセクシュアリティ. In: 福本修（訳） 現代クライン派の展開 誠信書房, 169-185.

Britton,R. (1998). BELIEF AND IMAGINATION. Explorations in psychoanalysis. London:Routledge. 松木邦裕（監訳）古賀靖彦（訳）(2002). 信念と想像：精神分析のこころの探求 金剛出版.

Feldman,M. (1989). The Oedipus complex.: manifestations in the inner world and the therapeutic situation. Steiner,J(ed) The Oedipus Complex Today. Karnac London.

Freud,S. (1892-1899). Aus den Anfagen der Psychoanalyse. Marie Bonaparte, Anna Freud and Ernest Kris(ed) (1950). London;Imago Publishing Co. 河田晃（訳）(2001) フロイト フリースへの手紙1887 - 1904 誠信書房.

Freud,S. (1905). Three Essays on the Theory of Sexuality. S.E. Ⅶ. 懸田克躬・吉村博次（訳） 性欲論三篇 フロイト著作集, 5, 人文書院

Freud,S. (1916). Introductory Lectures on Psycho - Analysis. S.E.XV&XVI. 懸田克躬・高橋義孝（訳）(1971) 精神分析入門（正・続） フロイト著作集, 1, 人文書院.

Freud,S. (1923). The Ego and The Es. S.E.XIX. 小此木啓吾（訳）(1970) 自我とエス フロイト著作集, 6, 人文書院.

藤山直樹 (2003). 精神分析という営み—生きた空間を求めて— 岩崎学術出版社.

Hinshelwood,R.D. (1994). Clinical Klein. The Cathy Miller Rights Agency,London. 福本修他（訳）(1999) クリニカル・クライン—クライン派の源泉から現代的展開まで 誠心書房.

川島重成 (1996). 元版「オイディプース王」を読む 講談社学術文庫.

Klein,M. (1926). The Psychological Principles of Early Analysis. In:Writings of Melanie Klein,Vol.1. London:Hogarth Press. 長尾博（訳）(1983) 早期分析の心理学的原則 メラニー・クライン著作集, 1, 誠信書房.

Klein,M. (1928). Early stages of Oedipus conflict. In: Writings of Melanie Klein,Vol.1. London:Hogarth Press. 柴田謙二（訳）(1983) エディプス葛藤の早期段階 メラニー・クライン著作集, 1, 誠信書房.

Klein,M. (1945). The Oedipus Complex in the light of early anxieties. In: Writings of Melanie Klein. Vol.1. London:Hogarth Press. 牛島定信（訳）(1983) 早期不安に照らしてみたエディプス・コンプレックス メラニー・クライン著作集, 3, 誠信書房.

Laplanche,J.・Pontalis,J. (1967). Vocabulaire de la Psychanalyse. Presses Universitaires de France,Paris. 村上仁（監訳）(1977) 精神分析用語辞典 みすず書房.

松木邦裕 (2010). 分析実践の進展 精神分析臨床論考集, 創元社.

O'Shaughnessy,E. (1989). The Invisible Oedipus complex. Steiner,J(ed) The Oedipus Complex Today. Karnac London.

Ogden,T. (1986). The Matrix of the Mind,object relations and the psychoanalytic dialougue. Jason Aronson Inc c/o Mark Paterson and Associates. 藤山直樹（訳）(1996) こころのマトリックス—対象関係論との対話— 岩崎学術出版社.